世田谷村日記

石山修武

五月二一日

朝地下ミーティング。昨夜は日建設計の橋本専務と四方山話し。今日はこれから栄久庵さんの特別講議である。スタジオGの運営を着実なものにするために何か具体的な道具づくりのプロジェクトが必要だな。十四時栄久庵さん講議。明日からバルセロナだそうで、体をいたわっていただきたいが、すでにそんな事は達観してしまっているな。道具論を自由自在に論じていただいた。この人物も変わらぬ人だ。もうすでに三〇年遠くから、時に真近に接してきたが、考えの中枢は微動だにしておらぬ。敬愛する由縁である。道具寺が和歌山に実現するかも知れぬと言う。

五月二二日

朝屋上菜園に生ゴミを埋める。イチゴをとって食べた。市販のイチゴと全く異なる味がする。恐いね売っている食品は。まだ満艦の花盛りではないが、それなりの風情にはなってきている、屋上は。今週の土、日も仕事で屋上には上れない。植えたい種が沢山待っているんだけれどナア。残念だ。

朝院推薦入試面接、気の弱い平板な学生が目につく。十二時より教室会議。夕方、カンボジアの渋井修さん来室。ひろしまハウスの件その他話し合う。再び学科会議の後世田谷に戻る。夜、磯崎新の『建築における「日本的なもの」』読み始める。磯崎新の日本論だな。かつて磯崎新は岡本太郎への追悼文で、岡本太郎は日本に愛情?を持ち過ぎたと書いていた記憶があるが、磯崎の希求の最たるモノは日本から世界史への亡命願望である。この書物はほとんど革命家のトーンで貫かれているように思うがどうか、過剰反応かな。日本的なモノ自体を解体しようとしている点に於いて、磯崎は自身の歴史を環状に、むしろラセン状に回転させ、建築家としてのスタート時の軸をゆるがせていない。全く何という壁だろうか。磯崎にしても栄久庵にしても戦後の廃墟を身を持って体験し、視てしまった体験を強く持つ。私は廃墟をわざわざ見るために出掛けなければならなかった。その違いは大きい。どうもこの二人共、眼の前にするとモジモジして遠慮がちになってしまうのは、その辺りに深い原因があると私はにらんでいる。